

第十四回南のシナリオ大賞応募作品

## ご祝儀の相場って？

登場人物

宮下 紬（29）宴会場スタッフ

駒田 康貴（27）紬の元彼

村野 裕子（38）紬の教育係

前川 真綾（25）新婦

取り立て屋の男

女性MC

紬 M 「私の名前は宮下紬、29歳。仕事は披露  
宴会場のホールスタッフ」

SE 結婚行進曲

紬 M 「なぜ、私は他人の幸せをこんなにも祝  
う仕事を選んだのか」

SE 拍手の音

紬 M 「私には結婚目前の彼氏がいた。奴の名  
前は駒田康貴。27歳年下彼氏。20代で結  
婚する最後のチャンスだった」

SE カフェ

紬 「お金は私がかする」  
駒田 「紬に甘えすぎだよな。俺」

紬 「私たち結婚するんだし。康貴のトラブル  
は私のトラブルだよ。一緒に返そう」

紬 M 「康貴は俯いてから上目遣いで私を見つめてくる。私は奴の上目遣いに弱い」

SE 扉を強く叩く音

男 「（大声）いるんだろ！宮下紬さん！返済日過ぎてんだよねー！」

SE ドカッとドアを蹴る音

紬 「（小声）康貴！なんで出ないの！」

SE 電話のコールする音

紬 M 「どうやら私は騙されたらしい。はーほんと焦るとろくなことが無い。康貴と連絡がつかずに数か月が経ち、私は一人で借金を完済した」

SE ドアを叩く音

男 「おい。宮下さん」

紬 「また？もう、返し終わってんだけど」

男 「あんだ。すげーな。連絡のつかない彼氏の借金を完済なんて」

紬 「あっ、あんだ達が脅すからでしょ！」

男 「その男気、気に入った。いいこと教えてやるよ」

紬 「い…いいこと？」

男 「あんだの彼、鹿児島県の霧島で結婚式挙げるってよ」

紬 「はあっ！なんで霧島？」

男 「俺としたことが、情が移ったっていうか今どき珍しくひたむきなあんだが不憫で。あんだの彼氏の足取り、調べちまったよ」

SE ドアを開ける音

紬 「その話、詳しく聞かせて」

男 「おっおう。俺っちに惚れんなよ」

紬 「（大声）惚れるわけないだろー！」

紬 M 「初めて見た取り立て屋の男の目は、シミみたいに小さかった」

SE 飛行機が飛んでいる音

紬 「あ。お母さん。うん着いた。東京から離れて、心機一転」

紬 M 「私は奴を、いや50万を取り戻すため奴の挙式予定の霧島のホテルに転職した。もちろん母に本当の理由は話していない」

紬 「うん。暖かい方が好きだし。冷え性治るかも。うん。また連絡するね」

SE スーツケースを転がす音

紬 M 「そして私は、奴の結婚披露宴のホールスタッフのメンバーに潜り込むことに成功した」

SE 活気のある厨房の音

裕子 「本日は百名様と大人数です」

紬 M 「私の教育係。村山裕子さん」

裕子 「気合入れていきましょう！」

紬 「はいっ！」

SE 結婚行進曲

女性 M C 「新郎新婦のご入場です！」

紬 M 「新郎の康貴と新婦にスポットライトが  
当たる。新婦の名前は前川真綾。晴れやか  
な顔をした康貴。私の50万」

女性 M C 「それでは乾杯の準備にうつらせて  
いただきます」

SE コルクが抜かれる音

紬 「（小声）よし。いくぞ！」

紬 M 「私はシャンパンボトルを持って高砂にいる康貴の後ろに近づいた」

紬 「この度は、おめでとうございます」

駒田 「え！つつつむっ！」

紬 「（小声）こんなところで再開なんて奇遇です  
ねー」

駒田 「うっ」

紬 「（小声）いつ返してもらえるんですか？私の  
50万」

駒田 「そ……それは……」

SE ヒールの音

紬 M 「村山さんが来た」

裕子「（小声）ちょっと宮下さん。何してるんですか？」

紬「すいません。シャンパンって、新郎から注ぐものなのかと思っちゃって」

駒田「（小声）早く持ち場に戻って」

紬「はい」

SE 招待客の乾杯の声

駒田「な……なんで。ここに紬が……」

女性MC「それでは皆さま、しばらくお食事とご歓談をお楽しみください」

SE 活気のある厨房の音

裕子「宮下さんちょっと、あなたね」

紬「（被せるように）これ醤油です？ソースじやなくて？」

裕子「醤油よ！これだから東京の人は」

紬「こんなにドロツとしてるからソースかと



思っ ちゃいました」

紬 M 「旅行で大好きになった霧島なのに奴の  
せいでこの醤油すら憎らしくなってきた」

SE 賑やかな宴会の音

紬 M 「私は再び康貴の背後に近づいた。奴は  
友人と楽しそうに話してやがる」

SE ビール瓶がぶつかる音

紬 「（小声）事故で脚を切断したはずのお母さ  
ん、脚がすっかり2本あるし、肝臓ガンで  
余命3ヶ月だったお父さんも、あんなに元  
気に酔っぱらって」

紬 M 「あ。あの人のビール、空になってる」

紬 「（にこやかに）ビールどうぞー」

駒田 「（小声）なんでここに紬が？」

紬 「（小声）自分の胸に手当てて聞いてみな」

駒田 「（小声）ほら、紬がさ。霧島の焼酎うま  
いってよく言ってたからさ。来てみたら、  
俺、気に入っちゃって」

紬 「（大声）そんな理由で逃亡先、決めんじゃ  
ねーよ！」

紬 M 「一瞬、会場全体が静かになった」

SE グラスが倒れる音

紬 「（大声）失礼しましたー」

SE 賑やかな宴会の音

駒田 「（小声）彼女のお父さん、亡くなっちゃ  
って。今、妊娠6か月で」

紬 「（小声）ろっ6か月って。連絡取れなくな  
ってからぴったりかよ。このくずが！」

SE ヒールの音

裕子「宮下さん。ちょっと」

SE 活気のある厨房の音

裕子「だから持ち場から離れないでって！」

紬「すいません」

裕子「もう三宅さんはホール配膳、外れても  
らいます。この後は、友人余興のサポート  
に回ってください」

紬「え。サポートって何をすればいいんです  
か？」

裕子「友人近くに立ってればいいから」

紬「あ。そうなんですな」

裕子「全く。前の式場でどんな教育受けてき  
てんのよ」

紬「いやー。あはは」

裕子「もうっ、ありえないんだけど」

紬「すいません」

裕子「あと今日の事。上に報告します。私の担当でクレームとか勘弁して」

紬 M「……ん？まてよ。友人代表って、受付でご祝儀集めてたよね」

紬「余興サポート、承知しました！」

女性 M C「それでは次はご友人の皆様之余興です。ご準備お願い致します」

SE 紙袋の音

紬 M「あった！ご祝儀発見！ここで回収できちゃうなんて、私、ついてんなー」

SE 賑やかな会場

紬 M「ん？康貴、何見てんの？すごい顔。うける」

女性MC「準備が整ったようです。ご友人の皆様、よろしくお願い致します」

絢M「そっか康貴にも見せてあげるか。ほーら、あなたの代わりに私が一人で完済した50万だよーって。私は紙袋を振った」

駒田「絢、何しようってんだよ！」

絢M「康貴が席を立った」

絢「え。何してんの？新郎は高砂でじっとしてろよ」

絢M「私はご祝儀の紙袋を持って非常ドアへ向かって走った」

SE 余興で盛り上がる会場

絢M「私は非常ドアの外に出た。このご祝儀

は全部、私のもの！」

SE 非常ドアの閉まる音

真綾 「すみません！」

紬 M 「息を切らした新婦の真綾が私の腕を掴んで立っている」

紬 「え。なんで……！」

真綾 「（被せるように）康貴さんと、何かあったんですよね？！」

紬 M 「突然、真綾は土下座をしてきた。ドレスの裾がぶわっと広がる」

真綾 「（大声）ごめんなさい！」

紬 「えっ」

真綾 「私が妊娠したせいですよね」

紬 「てか、そんな、土下座なんてしたら、お

腹の赤ちゃんが……」

真綾「このぐらい、大丈夫です！」

紬 M「真綾は身体を起こし、お腹を撫でた。  
なんか、それを見たらイラっとして。だから  
言っただけ」

紬「康貴の借金50万を私が返したの」

真綾「そ、そうだったんですか……」

紬「もう、康貴のことなんて、どうでもいい  
んだけど、50万は」

真綾「康貴のトラブルは私のトラブル。お金

はお返しします」

紬「えっ何それ……」

真綾「このままじゃあなたが不幸になる」

紬「なっ！ どういう意味よ」

真綾「だから、それは返してください」

紬 M「真綾は私の顔を見上げている。よく見

たら奴と同じような顔。あーもーなんか、

ばかばかしくなってきた」

紬 「もう、いいわよ」

紬 M 「私は目を背けながら、真綾にご祝儀の  
入った紙袋を差し出した」

紬 「康貴じゃなくて、あんたにだから」

真綾 「（鹿兎島弁）ありがとう」

SE 大勢の拍手の音

紬 M 「あーあ。また他人の幸せを祝ってしま  
った。私の幸せはいつ祝ってもらえるんだ  
ろう」

SE 何人ものおめでとうの声

紬 「（大声）あー！利息分、言い忘れたー！」

（終）